

2025年度

一般推薦入試・社会人入試・帰国生入試・外国人留学生入試（社会環境学部）

小論文（100点 90分）

問題 次の平井（2022）の一文を読み1と2に答えなさい。回答は解答用紙に問題順に記入しなさい。

21世紀以降の日本における「コミュニティ・インフレーション」（作成者注：コミュニティという用語が様々な出来事との関係で使われている状況）をじっくり考えなおす手がかりとなるのが、宮内泰介『人びとの自然再生』（2017）だ。この本は、タイトルに「自然再生」とあり、また冒頭も「自然とは何か」から説き起こされるので、一見「コミュニティ」とは関係ないように見える。だが、ちょうど本の中盤、次のような驚きが語られている。

集団移転の**合意形成**の話しあいをしているとき、住民たちの口から……「コミュニティ」が連発されるのに私は驚いた（宮内 2017:110）。

（中略）「コミュニティ」という言葉は、政策によって意図的に**動員**され、場合によっては排除や抑圧をもたらすものとして、確実に警戒されていた時期もあったのだ。さらに宮内の驚きの背後には、そこで住民が口々に語る「コミュニティ」が、それまで住民自身がつくりあげ大事にしてきた、身近な自然環境を分かち合い受け継いでいく「**資源管理**」のしくみそのものをさしていたことがある。

ここで「集団移転の合意形成」とあるように、舞台は東日本大震災の津波被災地である。宮城県石巻市旧北上町地区、北上川の河口部に位置し、大津波で多くの生命が失われた（3904人中、死者・行方不明者 276人、1151棟中、全壊 535棟〔宮内 2017〕）。津波被災地の多くでは被災後、安全性を確保すべく、従来の**集落**を捨て、新たな高台に暮らしの拠点をなかば強制的に移転する事業が進められている（吉野・加藤編 2019）。旧北上町でも同様だったが、比較的早く関係者の合意が図られていた。

震災後、その**プロセス**の**支援**に関わっていた宮内は、そのような合意形成が早く進んだ要因として「契約講」（作成者注：契約を結ぶ関係者によって結成された一定の目的を持つ集団）と呼ばれる、この地域独特の資源管理のしくみを見てとった。そうした発見が可能だったのは、宮内が震災前から通って人びとの話に耳を傾け、書き起こし、資源管理のしくみそのものを「**聞き書き**」から掘り起こしてきていたことと関わっている。

『人びとの自然再生』でまず紹介されるのも、この地域の海岸沿いの集落で育まれてきたフノリなど岩場の海藻の資源管理の人びとの語りである。さらに、北上川の河口部に広がる100ヘクタールものヨシ原をめぐる地域の営みが、中核的な素材としてくりかえし参照されていく。ヨシは河口や干潟などに群生する高さ2～3メートル、ときに4～5メートルにもなる細い草で、北上川河口部の群生地は、国内はもとより世界的にも最大規模の1つである。現在でも夏、暑い盛りに使う涼やかな**葦簀**^{よしず}として使われるほか、かつては茅葺^{かやぶ}きの屋根をふく材料として、大量に求められていた。**世界遺産**・白川郷の合掌造りの家々を見たことがある人もいるだろう。

こうしたヨシ原のような自然環境というと、まさに世界遺産のように、遠い昔からおのずとかたちづ

くられていたが、現在はなんらかの手立てを講じなければ守れなくなった環境だというイメージがあるかもしれない。もう少し考えて、葦簀が空調システムに、茅葺きが新建材にとって代わられたように、生産・流通システムや**ライフスタイル**の変化にともない、人びとの暮らしと自然との距離が「近くて遠いものになった」とイメージできる人もいだろう（鳥越・嘉田 1991）。

これに対し宮内（2017）が明らかにしたのは、複雑でダイナミックな人びととヨシ原との関わりだ。まず、北上川河口の広大なヨシ原は、**手つかずの自然環境**ではなかった。現在の北上川の河口部は、20世紀のはじめ、水害防止のため人工的に造りあげられたものだった。同じ時期、日本の多くの河川が同じように大規模に改修されている。東京の荒川や中川、江戸川、大阪の淀川や大和川なども、この時期の産物だ。

この河川改修によってはじめて 100 ヘクタールに及ぶヨシ原が姿を現した。さらに、ヨシは茅葺きのために使われていただけでなく、広大なヨシ原に隣接する多数の集落ごとに、牛の飼料用に使われたり、同じ葦簀でもノリの養殖用に使われたりしていて、屋根材として使われはじめたのは、実は全国的に茅葺き屋根が失われはじめた 1960 年代からだった。

しかも考えてみてほしい。このヨシ原は何もない場所にできたのではない。もともと人びとが切り拓いた田畑が、**防災**の名のもとに国家に収用され河川敷とされ、そこにヨシが大量に生えてきた。ヨシは屋根にも葦簀にも飼料にも使える。するとどうなるか。当然このヨシは誰のものかという話になる。実際、ヨシ原に面する集落のあいだで「鎌持ち出してえらい喧嘩」が起きた。そのとき集落の代表者が話し合い、境界線を決めた。その枠組みが現在も守られ、「契約講」の名のもとに、それぞれの集落で、いつ、誰が、どれくらい刈り取るのかを決めている。

この境界線の決め方を宮内（2017）は「実によく考えられた」と評している。単純に新たなヨシ原に面している度合いで決めていない。河川敷の犠牲になった度合いといった歴史的経緯や、たとえ山あいの集落でもひとまとまりの仲間であることを重視して、慎重に線引きされていた。実際に、この線引きによって集落間の**抗争**は止んだ。しかも敗戦、**高度経済成長**、過疎化といった社会変動をくぐり抜け、現在までヨシ原は維持され続けた。この経過はヨシ原の法的所有者である国も知っている。だからこそ国も集落による管理と利用を黙認している。

このように北上川河口部のヨシ原をめぐるのは、①自然環境の持続可能な使い方、②歴史的経緯や**弱い立場**の者への配慮、③人びとの合意そのものの持続性といった原理が相互に補完し合って、持続的な資源管理のあり方が受け継がれてきている。この地域ではそれは、フノリなどの海藻類や燃料の炭にする木材などさまざまな自然資源に共通にみられる。

こうした資源管理のあり方は「**コモンズ**」と呼ばれ、世界中で研究が進められている。

出典）平井太郎 2022「コミュニティはどこから来てどこへ行くのか」平井太郎・松尾浩一郎・山口恵子『地域・都市の社会学』有斐閣、pp.149-152

- 1 この文を 300 字～400 字で要約しなさい。
- 2 この文で主張されていると判断する内容について、500～600 字であなたの見解を述べなさい。